

第四編

地域の変化



4

大口町史 現代史編

- 第1章 地域のあゆみ
- 第2章 地名いまむかし
- 第3章 地名の由来・伝承

第一章

地域のあゆみ

一八七一年（明治四）年の廢藩置縣の後、尾張国と三河国に一二の県が置かれ、同年十一月に尾張国（知多郡を除く）は名古屋県に、三河国と知多郡は額田県となった。この時、町域内に存在した小口・御供所・長桜・大屋敷・外坪・余野・河北の七か村と、江戸時代の新田開発により成立した村々は、名古屋県に属した。翌一八七二年四月に名古屋県は愛知県と改められ、同年十一月に額田県を廢して愛知県の管轄に移し、律令制から永く続いた尾張国・三河国は愛知県として統合された。

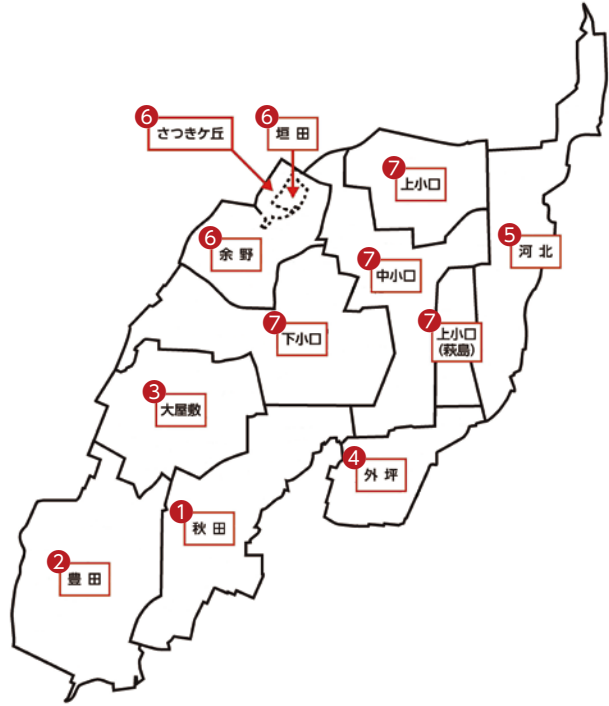
一八七八年七月に、郡区町村編制法が公布された。県では十二月に施行され、丹羽郡役所が小折村（現江南市布袋）に設けられた。町域内は七か村に集約され、御供所村は豊田村に、長桜村は秋田村に近隣の新田村と合併して改称した。そして丹羽郡の治下に入り、戸長・戸長役場が置かれた。一八八四年には、小折村に丹羽郡役所庁舎が建てられ、

戸長役場が改められた。外坪・河北・余野・小口で二か所、秋田・豊田・大屋敷で一か所の計三か所に連合戸長役場が設置された。

一八八八年四月、市制・町村制が公布され、町域内では翌年十月、太田村（秋田・豊田・大屋敷）・小口村（余野・小口）・富成村（河北・外坪）の三か村に合併し、七か村の名称は各村の大字名となった。

本章では、大字名となった秋田・豊田・大屋敷・外坪・河北・余野（余野・垣田・さつきヶ丘）・小口（上小口・中下小口）の順に地区の概要を紹介する（4―1―1）。

なお、一九〇六年に大口村が誕生した翌年度には区長制度が始まっている。『大口村誌』には、一九〇七年を第一回とし、一九三二（昭和七）年の第二六回までにおける区長及び区長代理の氏名が書かれている。地区名の記載がないため氏名からの推察となるが、最初の七人が区長で秋田・



4-1-1 町内区域図

豊田・大屋敷・外坪・河北・余野・小口の順で書かれ、小口区長は下小口・中小口・上小口の順で輪番となっていたと考えられる。その後に、区長代理の氏名が書かれている。しかし、年によって七人から一〇人と人数に差がある。一九四四年度の区長及び区長代理の告示書類には、七人の区長と七人の区長代理の名前が書かれている。

『五十年の歩み』には、区長の氏名が九人書かれているこ

とから、この年以前に区長は九人となり、その後、一九六四年二月から垣田（県営住宅）が追加され、一九八七年に余野から分区した、さつきヶ丘の区長が選出されるようになった。二〇二三（令和五）年現在、毎年一人の区長が選出され、地域活動の代表者となっている。一九八〇年代以降の名称地番変更にもなう境界変更により、区長は大字の代表者から行政区の代表者となった。

各節に掲載した人口の推移については、一九五三年から集計が始まった行政区ごとの人口データを主に使用した。また、名称地番変更にともない、居住地が隣接行政区に変わったたり、分家により隣の行政区に所有する土地に新居を建てたりした場合には、元の行政区に属することもある。このため、地区の人口が地区内の土地に居住する人のみを表すわけではない。

人口とともに、江戸時代における各地区の状況については、一六五五〜七三年（明暦〜寛文年間）に尾張藩の国奉行所の管轄で作成された『寛文村々覚書』（かんぶんむらむらおぼえがき）（以下『覚書』）と、尾張藩士である樋口好古（ひぐちよしかる）が一七九二（寛政四）年から作成し始め、一八二二（文政五）年に完成した『尾張徇行記』（おわりじゆんぎょうき）（以下『徇行記』）という二つの地誌をもとに述べる。

第一節 秋田

町の南部に位置し、南東は小牧市、西は豊田地区に接する。県道宮後小牧線・県道若宮江南線・国道一五五号が東西に走る。水田を中心とした農業地域である。大口町中央公民館・大口町健康文化センター・丹羽広域事務組合消防本部大口出張所が地区内に立地する。

歴史

縄文時代草創期の石器である有舌尖頭器が中原と北替地から出土し、縄文土器片も北替地・東藪山・南山から出土している。その他、桜塚古墳や明治時代に道路工事で滅失した仏鬼塚古墳などが立地する。

秋田と豊田の境にある天神社は、平安時代末期に成立した『尾張國內神名帳』の丹羽郡の項にある「奈良志天神」であり、もともと御供所村奈良子（豊田地区）の鎮守社であった。その後、長桜村（秋田地区）の発展により長桜村の鎮守社となった（第三編第三章第一節）。

『信雄分限帳』によると、長桜に織田信雄の家臣丹羽民部

の知行地（領地）があったが、一五八四（天正十二）年、小牧・長久手の戦いで羽柴秀吉方に占領され不知行（領地でなくなる）となった。

江戸時代に尾張藩によって作成された『覚書』に書かれた村で、後の大字秋田となる村として、長桜村・入鹿長桜替地新田・入鹿八左衛門新田・入鹿伝右衛門新田・宗雲入鹿新田がある。すべての村は蔵入地（尾張藩の直轄領）で小牧代官所の管理下にあった。

長桜村は、先述のとおり天神社を鎮守社として、そこから東南を中心に集落が形成されていった。『徇行記』によると、生産すべき石高に対し、労働力不足のため散田（荒地または川辺など、常時は課税されない土地を耕し、軽い税を納めた田）が多く貧村とある。

入鹿長桜替地新田は、「替地」という地名の由来として以下のような伝承が残っている。江戸時代に紀伊国田辺城主安藤直次（紀伊藩付家老）の子で訳あって浪人となった安藤彦十郎直高が、一六四九（慶安二）年に愛知郡古渡村（現名古屋市中村区古渡）に来て棚村小十郎と出会った。直高は、子の安藤伊兵衛と棚村小十郎をともない長桜村に移り、村の土豪であった鈴木重任に許しを得て、長桜村の南辺を

開発した。さらに南方の土地（現替地集落）を開墾して集落ができた。同地は犬山城主成瀬氏の領地であったため、尾張藩主に申し出て小口村にあった尾張領の一部と交換した。それから「替地」と呼ばれるようになったという。

入鹿八左衛門新田は、庄屋八左衛門の先祖五代以前に長桜村の北に集落を形成し、開墾した田は長桜村・宗雲新田・伝右衛門新田に入交り、六か所程に分かれていた。一七八二（天明二）年の洪水で田が荒廃し、御供所村の伴左衛門、小折入鹿出新田の弥左衛門が耕作を引き継いだとされる。

入鹿伝右衛門新田は、庄屋伝右衛門の六代前にあたる先人が、安良村（現江南市安良）から移り住み、一六六二（寛文二）年には周辺の荒地の大半を開墾した。

宗雲入鹿新田は、奥州から来た小笠原宗雲が家来の左右田弥次右衛門と佐竹左大夫に開墾させてできた集落である。左右田弥次右衛門は、一六六一年に屋敷地内に権現社を勧請したとあり、これが現在の熊野社にあたる。集落は、南屋敷・中屋敷・北屋敷に分かれていた。

一八七八（明治十一）年に長桜村と四つの新田村は、合併して秋田村となる。一八八九年十月に太田村大字秋田となり、以後、名称地番変更が施行されるまで大口村・大口

町の大字名のひとつであった。一八九〇年以降水利組合を相次いで設立し、昭和初期には養鶏が盛んであった。一九七九（昭和五十四）年から、農村総合整備モデル事業が始まった。

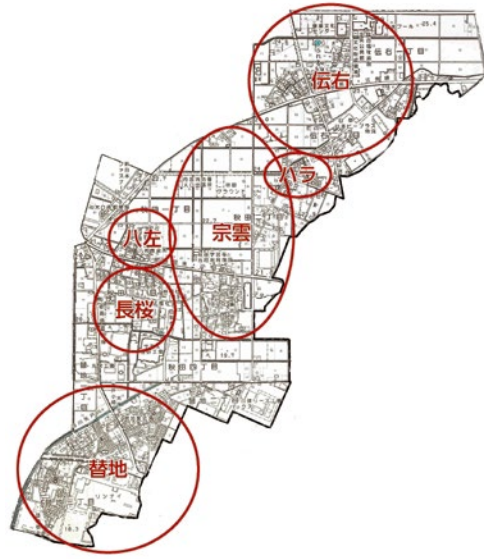
名称地番変更により、一九九二（平成四）年一月九日から秋田字柳原は、大屋敷三丁目と奈良子二丁目になった。大屋敷三丁目となった旧秋田字柳原三三番地には桜塚古墳があり、名称地番変更以降も長桜地区で維持管理されている。

地区内集落

秋田地区内は、江戸時代からの名残で、長桜（ハラ含む）・替地・八左・宗雲・伝右の五つの集落（組）で構成し、輪番で区長を選出している。各組は、複数の班で成り立っている（4-1-2）。

「ハラ」は、通称名として残る旧小字の「中原」を中心とした地域のことである（第四編第三章第一節）。住民によると、長桜から新田開発に出て代々墓地も同じ場所であったという。実際に「ハラ」の住民は、隣接する伝右・宗雲ではなく、長桜と付き合いがある。人口は、微増傾向にあり、町内全人口の九%台で推移している（4-1-3）。

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1670頃	222	7	43	7.7
1822頃	456	9.6	113	10
1932	740	10.1	129	9.7
1953	838	9.6	—	—
1963	817	7.2	—	—
1973	1,036	6.6	301	5.7
1983	1,572	9.3	389	8.1
1993	1,766	9.6	483	8.8
2003	2,096	9.9	634	9.1
2013	2,256	9.9	782	9.4
2022	2,368	9.8	910	9.3



4-1-2 秋田地区内集落図

4-1-3 秋田の人口・世帯の推移

(1670年頃は『寛文村々覚書』、1822年頃は『尾張徇行記』、1932年は『大口村誌』、1953年以降は町の統計データによる)

※表中「—」は記載なし。

第二節 豊田

町の南西部に位置し、北は大屋敷地区、東は秋田地区、西は五条川を境に江南市、南は小牧市に接する。国道一五五号・県道若宮江南線が東西に走る。北部は住宅地、南部は水田中心の農業地域が広がる。南保育園・大口南小学校が地区内に立地する。

歴史

縄文時代草創期の石器である有舌尖頭器が西河原から出土し、白木（現豊田一丁目）地内には弥生時代から古代の集落遺跡と古墳が所在し、明治時代に道路工事で滅失してしまったが、仏鬼塚古墳・いわき塚古墳の出土品（第三編第六章第二節）が残されている。

鎌倉時代から室町時代にかけて、堀尾氏が御供所に入り土豪になったといわれている。一五五九（永祿二）年、織田信長により岩倉城が攻め落とされるまで、堀尾泰晴・吉晴親子は岩倉城に出仕していた。一四八四（文明十六）年に桂林和尚により長楽寺が建立されており、御供所は集落

として成立していた（第三編第三章第二節）。

『覚書』に記載された村名のうち、後の大字豊田に入るものとして、御供所村・入鹿三右衛門新田・小折入鹿出新田・入鹿又助新田・入鹿九郎右衛門新田がある。なお『徇行記』では「入鹿九郎左衛門新田」とあるが、ここでは「九郎右衛門」とする。小牧代官所の管理下にあり、新田村は蔵入地（尾張藩の直轄領）であった。

御供所村について『覚書』によると、枝郷（村内で元の集落（本郷・元郷）から分出した集落）として奈良師（現奈良子）と書かれている。さらに、『徇行記』によると、幼川（現五条川）の南に東奈良師・北に西奈良師と分かれている。御供所村は竹木がよく茂り、土もよく、生産すべき石高に対し農民の労働力も足りており、農民の頭である伴左衛門は村内と近隣の村にも新田を多く持ち、佐右衛門・繁右衛門も持ち高が多いとある。なお、一八四一（天保十二）年の御供所村と九郎右衛門新田の村絵図（以下「天保の村絵図」）には「庄屋 社本伴左衛門」とある。また、御供所村は、蔵入地と給知（藩士の所領）の蔵給立合（同じ村で尾張藩に年貢を納める土地と藩士の所領があること）で尾張藩士一九人の名前が『徇行記』に書かれている。

入鹿三右衛門新田について一六七〇年頃と一八二二年頃を比較すると、戸数の三軒は変わらないが、人口は五人から一五人に増加しており、新田村として維持されている様子がわかる。また、『徇行記』には開墾当時、庄屋の伊右衛門が一人で住んでいたと書かれている。

小折入鹿出新田について一八二二年頃の人口をみると、一六七〇年頃の六軒五三人から一八軒九一人と増えている。この新田は、庄屋の（土田）弥十郎の先祖が開墾したが、弥十郎の宅地は入鹿三右衛門新田の東にあった。入鹿三右衛門新田は小折入鹿出新田の支邑（小折出新田から分かれた村）となっている。

入鹿又助新田は、『覚書』に一戸三人とあり、新田主又助が居住していた。しかし、家が途絶えて小折入鹿出新田の庄屋がこの新田も兼務することになったと『徇行記』にある。天保期の村絵図は、小折入鹿出新田と入鹿又助新田が一枚に描かれている。

入鹿九郎右衛門新田は、『覚書』や一八四一年と一八五一年（嘉永四）年の村絵図に「入鹿九郎右衛門新田」と表記されているが、『徇行記』は「入鹿九郎左衛門新田」となっている。一八二二年頃には、人口が一六七〇年頃の五戸三五人

から四戸一二人に減少し、目標石高に対して労働力不足により貧しい村となったため、新田を開いた九郎左衛門の末裔は零落し、御供所村の庄屋の管理となったとある。

一八七八（明治十一）年に御供所村と四つの新田村は、合併して豊田村となる。一八八九年十月に太田村大字豊田となり、以後、名称地番変更を施行するまで大口村・大口町の大字名のひとつであった。

明治時代には、五条川筋の水力を利用した水車業が三軒あり、精米・精麦などがおこなわれていた。一九〇七年頃から養鶏が盛んとなる。秋田と同じく一八九〇年以降水利組合を設立し水利事情は改善された。一九六四（昭和三十一年）年農業構造改善事業に着手した。

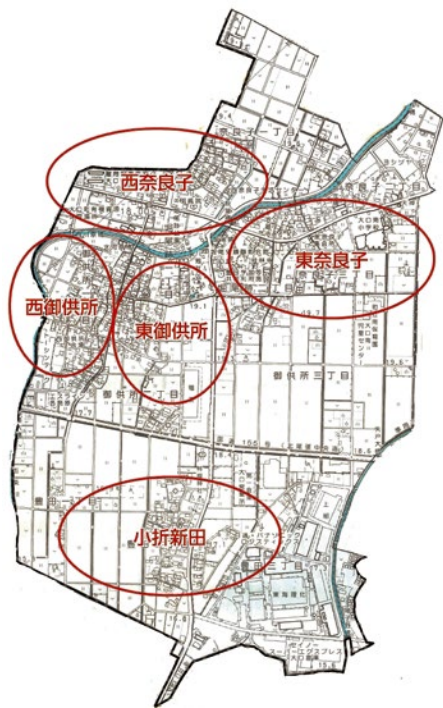
地区内集落

東御供所・西御供所・東奈良子・西奈良子・小折新田の五つの集落（組）からなり、輪番で区長を選出している。副区長は、次年度の区長内定者が務める（4-1-1-4）。

人口は、一九七三年五月末の二九三六人をピークに減少傾向にあり、世帯数は、増加傾向にある（4-1-1-5）。

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1670頃	422	13.3	74	13.4
1822頃	701	14.7	167	14.7
1932	1,294	17.7	237	17.9
1953	1,626	18.7	—	—
1963	1,622	14.4	—	—
1973	2,757	17.6	1,127	21.5
1983	2,013	11.9	493	10.3
1993	2,079	11.3	533	9.7
2003	2,002	9.5	562	8.1
2013	1,926	8.4	642	7.7
2022	1,826	7.5	720	7.3

4-1-5 豊田の人口・世帯の推移
 (1670年頃は『寛文村々覚書』、1822年頃は『尾張徇行記』、
 1932年は『大口村誌』、1953年以降は町の統計データによる)
 ※表中「-」は記載なし。



4-1-4 豊田地区内集落図

第三節 大屋敷

町の中西部に位置する。北から北東にかけては下小口地区、東から南にかけては秋田地区、南は豊田地区、そして西は昭和用水を境に江南市に接する。大口中学校・大口郵便局・大口町野球グラウンド・町民会館・愛知北農協大口支店・大口交番が所在する。

歴史

縄文時代草創期の石器である有舌尖頭器が山間（現高橋二丁目）から出土し、大御堂地内には弥生時代の遺跡がある。ほ場整備により滅失した古墳もあるが、大日塚古墳・しようねん塚古墳が残っている。

一五四三（天文十二）年六月十六日付け戒蔵坊嚴良起請文に「おや敷」を含む七か村が「尾州石枕戒蔵坊代々白山先達所」として記され、地区内に白山信仰が広がっていたことが知られる。また、『信雄分限帳』によると大屋敷に織田信雄の家臣二宮与三右衛門と佐橋弥右衛門の知行地（領地）があった。一五八四（天正十二）年、小牧・長久手の

戦いで羽柴秀吉方に占領され不知行となった。

『覚書』によると、大屋敷村の項には、枝郷として「高橋・大御堂」とある。社は六か所「三明神・神明・諏訪・県宮・天神・八幡」とあり、これらの所在は、天保期の村絵図によると本郷集落付近に天神社、高橋集落付近に諏訪社、大御堂集落付近に縣社・三明神社、五条川沿いの新田集落付近に神明社が描かれている。また、『丹羽郡稲木庄大屋敷村絵図面』（一八〇〇年代中頃成立）では、三明神社の場所に「三名神社・八幡社・白山社」とある。

『徇行記』によると、大屋敷村は、尾張藩領小牧代官所支配下で、家臣二五人分の給知高七九五石、藩の蔵入地高五一石であった。また、決められた村の生産高に対し人口が少なく、他の村から九〇人ほどに対して耕作を依頼しており、村中が労働力不足のため、徐々に貧しい村となったとある。御供所村の富裕農である伴左衛門は、大屋敷村内で多くの田畑を持っていたとも書かれている。

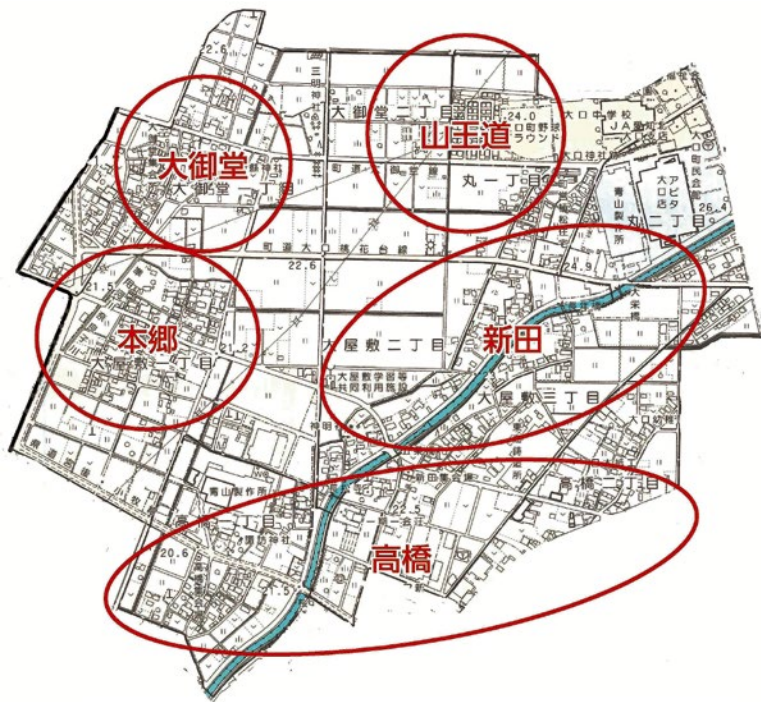
『木津用水史』や『大口町史』によると、五条川筋に水車が二か所あり米麦をついたとあり、一八三〇年代（天保年間）頃から明治初年まで運上金を納めていた。

一八一〇年前後（文化年間）から天然の桑による養蚕が

おこなわれており、明治に入り盛んとなった。それにともない、桑苗などの苗木栽培も盛んとなった。

一八八九（明治二十二）年十月に太田村大字大屋敷となり、名称地番変更が施行されるまで大口村・大口町の大字名のひとつであった。

一九七九（昭和五十四）年二月、大屋敷字丸は名称地番変更により下小口七丁目の一部となった。この地は、『丹羽郡稲木庄大屋敷村絵図面』（一八〇〇年代中頃成立）に「中嶋佐兵衛佑城跡」とあり、その周囲に「丸ノ内・字丸裏」といった小字名も書かれている。それが由来となり、明治に入ると、その一帯を大屋敷字丸とした。そして、名称地番変更の際、「丸」という地名が残るよう、字丸から西側の範囲を「丸一丁目・丸二丁目」とした。



4-1-6 大屋敷地区内集落図

地区内集落

本郷・大御堂・高橋・新田・山王道の五つの集落があり、輪番で区長を選出している。副区長は、次年度の区長内定者が務める。区会議員は、各集落（組）の総代・副総代二人・会計の二〇人で構成される（4-1-7）。

人口は、一九八五年の一八四五人をピークに減少し、二〇〇六（平成十八）年の一三八三人を底に増加に転じている（4-1-7）。

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1670頃	529	16.6	82	14.7
1822頃	538	11.3	137	12.1
1932	796	10.9	150	11.3
1953	962	11	—	—
1963	1,033	9.2	—	—
1973	1,374	8.8	431	8.2
1983	1,829	10.8	584	12.1
1993	1,670	9	547	10
2003	1,433	6.8	486	7
2013	1,533	6.7	556	6.7
2022	1,550	6.4	621	6.3

4-1-7 大屋敷の人口・世帯の推移

（1670年頃は『寛文村々覚書』、1822年頃は『尾張御行記』、1932年は『大口村誌』、1953年以降は町の統計データによる）

※表中「—」は記載なし。

第四節 外坪

町の南東部にあり、北は中小口地区の新宮、西と南は小牧市、東は木津用水を境に犬山市に接している。北部を県道若宮江南線が東西に、西部を国道四一号が南北に走り北西部で交差する。水田中心の農業地域に企業が立地している。

歴史

東部の神明社周辺に弥生時代の遺跡があり、付近に古墳がある。特に、明治末の道路新設工事により滅失した石亀塚古墳からは銅鏡が出土しており、町指定文化財となっている（第三編第六章第二節）。

一五八四（天正十二）年の小牧・長久手の戦いで三月二十八日、徳川家康の本陣である小牧山に対して秀吉は楽田に本陣を構え、外坪村にも布陣した。

江戸時代に入り、『覚書』には、戸数三三三戸・人口二二一人とあり、『御行記』には戸数六八戸・人口二〇一人とある。また、外坪村は、尾張藩領小牧代官所支配下で、家臣八人分の給知（藩士の所領）高三四石、藩の蔵入地（尾

張藩の直轄領)高一六石であった。村の本郷は小口村に接しており、集落は本郷・新田屋敷・松山屋敷・寺屋敷の四つに分かれていた。決められた村の生産高に対し、人口が少なく労働力不足で貧村であった。

一八九〇(明治二十三)年と一八九二年、木津用水の堤防が外坪地内で決壊し、村内に被害が出た。一八八九年に富成村の大字となり、以後、名称地番変更が施行されるまで大口村・大口町の大字名のひとつとなる。一九一〇年に小牧町巾下耕地整理組合に加入して、一筆一反歩に耕地整理をおこなった。それ

にとまなう換地処分により旧小字名も変更される。一九六四(昭和三十九)年、農業構造改善事業に着手した。

地区内集落

郷・巾・松山の三集落(組)から成り立っている。江戸時代の集



4-1-8 外坪地区内集落図

落四区分のうち、本郷が郷と呼ばれ、新田屋敷が東部段丘上の集落で巾と呼ばれ、松山屋敷・寺屋敷が松山となった。それぞれの集落には班が存在する(4-1-8)。

従来、区長の選出は地区で区長・副区長を選出していたが、選出された人の年齢に開きが出てきたので、これを是正するため、区政改革委員会を組織し、区長の選出区域を外坪一円とし立候補制とした。のちに、副区長が翌年の区長に就任するよう改正された。

人口は多少の増減があるものの、人口割合は徐々に減少しつつある(4-1-9)。

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1670頃	221	6.9	33	5.9
1822頃	201	4.2	68	6
1932	539	7.4	108	8.1
1953	646	7.4	—	—
1963	625	5.5	—	—
1973	838	5.3	267	5.1
1983	778	4.6	210	4.4
1993	841	4.6	233	4.2
2003	809	3.8	228	3.3
2013	811	3.6	271	3.2
2022	741	3.1	269	2.7

4-1-9 外坪の人口・世帯の推移

(1670年頃は『寛文村々覚書』、1822年頃は『尾張徇行記』、1932年は『大口村誌』、1953年以降は町の統計データによる)

※表中「—」は記載なし。

昭和二十年代の町内会（外坪）

昭和二十年代は本当に貧しい十年間でありました。

幸い、大口村は大半が農家でしたから物は無くとも食べることでだけは、お腹を空かすこともなく過ごすことができました。

名古屋など都会から食物を求めに来る人がありました。わが家の遠縁は、家族で訪れて子供たちに腹一杯ご飯を食べさせていました。祖母をなつかしく思い出します。

そんな中、婦人会活動・青年団活動が生まれました。

当時は野球が唯一の娯楽で、子どもも青年も野球に熱中しました。時代でもありプロ野球では川上・大下・杉下といった名選手が活躍した時でもありません。

わが外坪は全くの農村であり、ほとんどの家が米作りをしておりました。麦を作り、大根の種を採り、菜種を作り、そして米作り、春から秋にかけて麦作り、米作りの合間に養蚕と、年中暇なしの一年でありましたが、共同作業がそれなりに盛んでありました。

物が無い時代、機械化のない手作業の時代、糶糶りも共同作業、菜種から菜種油を採る、圧縮機を共同で購入し、お菓子などほとんどない時代、米をばさして作る米菓子、これも共同購入。さとうきびから黒砂糖を精製する。秋はあちこちの用水の

水が引くと水路の一部を堰せきき止めて、水を下流にかき出して鮒ふなや鯰なます、川魚を捕まえた。これを「かえどり」といいましたが、これも町内共同での魚取り、今思い返すと楽しい思い出です。

当時は何をすることも共同作業、助け合いの時代でありました。いつも「寄り合い」といつて何かと相談し決定し、これが中々決まらない、こんな会合がしょっちゅうありました。

お宮やお寺の行事も今とは違い村中総出の時代、尾張富士の石上げ祭、お宮では演芸会・映画会・お祭り・輪くぐり・初詣。みんなが集い語らう。このごろは、こうした集いはずいぶん減って、寂しい思いです。

子どもたちは「山の子」でお米を持ち寄り、親たちが作ってくれる五目ご飯を食べ、夜遅くまで騒いで楽しみ、皆で魚取り、皆一緒に泳ぎ、上級生は下級生をいたわり、物には恵まれない時代ではありましたが、助け合い、いたわりのある良き時代でありました。

（昭和十三年生まれ）

第五節 河北

町の北東部に位置する。東は五条川、北は郷瀬川を境に犬山市、南は外坪地区、西は上小口地区に接する。県道斉藤羽黒線・草井羽黒線が東西に走る。水田中心の農業地域で、江南丹羽環境管理組合・丹羽広域事務組合水道部が地区内に立地する。

歴史

一八六八（慶応四）年の入鹿切れ（第一編第三章第一節）により町内で一番多く犠牲者を出した地域である。

近世は、『覚書』に「川北村」と記載され、「枝郷 中沖 二ツ屋」とある。尾張藩領小牧代官所支配下ではあるが、人口は戸数四六戸・人口二八七人である。『徇行記』では村名が「小弓庄河北村」となり、戸数八五戸・人口三五六人とある。新田を除き尾張藩付家老で犬山城主成瀬隼人正の給地であった。北部を流れる郷瀬川（善師野川）が決壊するなど水害に悩まされた村で、村内には水車があり、運上金を出していた。

一八八九（明治二十二）年に富成村の大字となり、以後、名称地番変更が施行されるまで大口村・大口町の大字名のひとつであった。『大口村誌』によると、一九二五年前後（大正末期から昭和初期）には、人絹カベ織布工場が三軒設立された。人絹カベとは、人造絹糸による壁紙のことである。一九六四（昭和三十九）年から農業構造改善事業がおこなわれた。

地区内集落

河北は、上郷・仲沖・二ツ屋の三つの集落（組）からなり、区長は上郷二年、仲沖一年、上郷二年、二ツ屋一年のサイクルで選出している。副区長は、次年度の区長内定者が務める（4-1-10）。

人口は増加傾向にあり、特に二〇〇七（平成十九）年から前年から人口で二〇〇人増、世帯数で八〇世帯ほど増加した（4-1-11）。



4-1-10 河北地区内集落図

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1670頃	287	9	46	8.2
1822頃	356	7.5	85	7.5
1932	706	9.6	124	9.4
1953	841	9.7	—	—
1963	844	7.5	—	—
1973	932	5.9	187	3.6
1983	1,160	6.8	258	5.4
1993	1,311	7.1	311	5.7
2003	1,288	6.1	363	5.2
2013	1,676	7.3	550	6.6
2022	1,749	7.2	632	6.4

4-1-11 河北の人口・世帯の推移

(1670年頃は『寛文村々覚書』、1822年頃は『尾張徇行記』、
1932年は『大口村誌』、1953年以降は町の統計データによる)

※表中「—」は記載なし。

第六節 余野（垣田・さつきヶ丘）

町の北西部に位置する。北と西は扶桑町、東は中小口地区、南は下小口地区に接する。南端を県道小口岩倉線、北端を県道斉藤羽黒線が東西に走る。名鉄犬山線柏森駅に近く、住宅地域となっている。神社は余野神社、寺院は山姥物語ゆかりの徳林寺と全徳寺がある。西保育園・大口西小学校が地区内に立地する。

歴史

縄文時代の遺跡として垣田・西浦・清水遺跡が、弥生時代の遺跡として西浦・清水・日高遺跡がある。清水遺跡からは、弥生時代の壺・高坏・小型仿製鏡などが出土しており（第三編第六章第二節）、余野四丁目地内（旧字神明下）からは全長五・六cmの小型銅鐸が発見された。

徳林寺の寺伝によると、一二九四（永仁二）年、余野村在住の武士、小池与八郎貞宗が、空母山徳蓮寺と称した真言宗の寺院を建立し、一時衰退したが、一四六九（文明元）年、小口城主、織田遠江守広近が大龍山徳林寺と改称し臨

済宗の寺院として再興した（第三編第三章第二節）。

『信雄分限帳』によると、余野に織田信雄の家臣、滝善太郎の知行地（領地）が存在した。しかし、一五八四（天正十二）年、小牧・長久手の戦いで羽柴秀吉方に占領され不知行となった。『徇行記』には、このとき徳林寺の本堂と塔頭を焼失したとある。

江戸時代に入り、一六七〇年頃と一八二二年頃の戸数・人口を比較すると、戸数は七二戸から一三二戸に、人口は四二一人から五二〇人になっている。余野村は、尾張藩領小牧代官所支配下で、家臣一二人分の給知（藩士の所領）高四八九石、藩の蔵入地（尾張藩の直轄領）高五〇石であった。また、決められた村の生産高に対し人口は多かったが、年貢を納めるべき農家が徐々に少なくなり貧村とある。そして村内は畑が多くやせた土地には茶畑が入り混じり、砂地なので大麦は実らず茶と桑の間に小麦と荏（エゴマ）を栽培した。桑の葉は養蚕用として他村へ売ったと記されている。

一八八九（明治二十二）年に小口村の大字となったが、一八九五年に柏森村に編入され同村の大字となる。その後、一九〇六年に大口村の大字となり、以後、名称地番変更が

施行されるまで大口村・大口町の大字名のひとつであった。

一九一八（大正七）年に余野信用販売購買利用組合が設立され、資金の貸し付け、食糧・農業に必要なものを共同購入して組合員に販売し、農業生産物の協働販売もおこなった。また、一九二〇年に余野字西浦で大口製糸株式会社が設立され、設立当時は従業員二八〇人で年間七〇〇梱の生糸を産出し地域産業の発展に貢献した。この会社は一九三五（昭和十）年頃に不況のため解散してしまう。

一九六〇年に余野字垣田で県営住宅が完成し、一九六四年から垣田区として独立した。さらに一九八七年には、地区の一部がさつきヶ丘区として独立している。

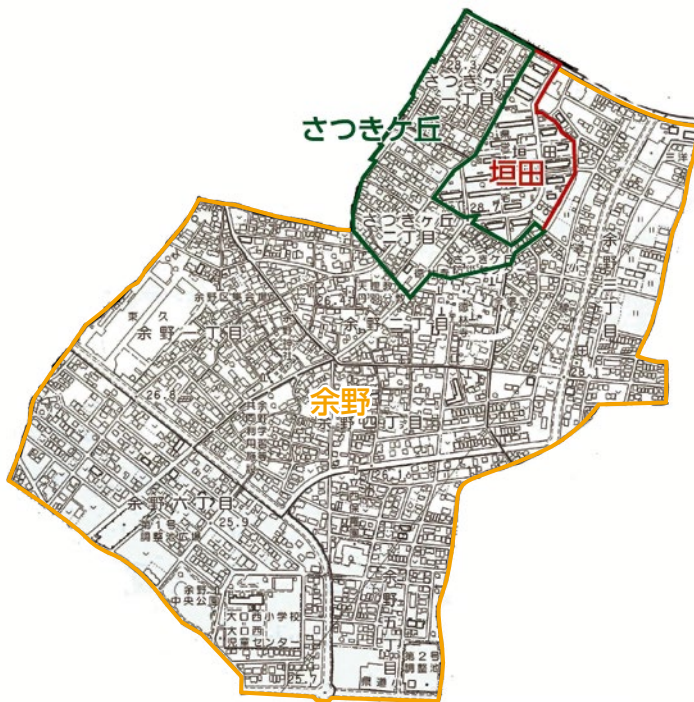
一九七〇年、余野を含む市街化区域を設定すると、鉄道の駅に近い場所から宅地化が進んだ。さらに一九八七年一月には、大口余野特定土地区画整理組合が認可され、一九九七（平成九）年二月に事業が完了すると、人口は飛躍的に増加した。また、町内全人口に対する余野区の人口割合が一〇%から二〇%となり、余野区に人口が集中して増加している。一九九三年に人口が一旦減少しているのは、さつきヶ丘区民の人口を別にしたためである（4-1-12）。

地区内集落（4-1-13）

余野区 かつては、地区内を南北に流れる昭和用水を境に、川東と川西に集落を分けていたが、急激な人口増加と宅地化が進んだことから、余野区を東西南北の四つの班に分けた。区長・副区長・評議員で構成する役員は、公募及び前年度役員からの推薦により選出される。副区長・評議員の定数は前年度の区長が決める。評議員の定数については、おおむね一〇〇世帯につき一名で決めている。

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1670頃	421	13.2	72	12.9
1822頃	520	10.9	132	11.6
1932	781	10.7	129	9.7
1953	912	10.5	—	—
1963	1,025	9.1	—	—
1973	1,803	11.5	455	8.7
1983	2,530	14.9	672	14
1993	2,413	13.1	777	14.1
2003	4,187	19.8	1,434	20.6
2013	5,174	22.7	1,874	22.4
2022	5,829	24.1	2,403	24.4

4-1-12 余野区の人口・世帯の推移
 (1670年頃は『寛文村々覚書』、1822年頃は『尾張徇行記』、
 1932年は『大口村誌』、1953年以降は町の統計データによる)
 ※表中「-」は記載なし。



4-1-13 余野・垣田・さつきヶ丘区内集落図

垣田区 一九五九年の伊勢湾台風直後に県営住宅が余野字垣田において建設を開始し、翌年に完成した。完成以降は入居が相次ぎ、約三年で人口が約一七倍となった(4-1-14)。一九六四年二月から、県営住宅の町内会長が垣田区長となる。一九七九年から三年かけて、三二五戸のうち一九六〇年に建てられた木造平屋一五八戸が建替えられ、鉄筋コンクリート三階もしくは四階建てとなった。

さつきヶ丘区 一九八七年に余野から分区し、さつきヶ丘区として区長が選出されている。二〇二三(令和五)年現在、区内は一八組に分かれ、組長は一九人いる(二〇組は一〇一・一〇二で二人の組長)。区会は、区長・副区長・会計(区会議員兼務)・顧問・集会所委員(区会議員兼務)・区会議員四人(二〜四組担当・五〜九組担当・一〇〜一三組担当・一四〜一八組担当)からなる。分区以降は大きな人口の増減がない分、高齢化率は徐々に上昇し、二〇一一年以降は高齢化率が三〇%を上回っている(4-1-15)。

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1960	72	0.7	—	—
1963	1,235	11	—	—
1973	1,304	8.3	372	7.1
1983	948	5.6	284	5.9
1993	1,204	6.5	405	7.4
2003	1,096	5.2	398	5.7
2013	927	4.1	397	4.8
2022	663	2.7	338	3.4

4-1-14 垣田(県営住宅)の人口・世帯の推移
(町の統計データによる)
※表中「—」は記載なし。

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1987	737	4.2	200	4.1
1993	816	4.4	254	4.6
2003	852	4	294	4.2
2013	836	3.7	324	3.9
2022	861	3.6	375	3.8

4-1-15 さつきヶ丘区の人口・世帯の推移
(町の統計データによる)

さつきヶ丘区の歴史

さつきヶ丘は、一九八七年に大口町の行政区として余野区から独立しました。

一九五九年の伊勢湾台風直後に、県営垣田住宅として木造建ての簡素な家が三一五戸建てられました。その周りは殆ど桑畑と田畑ばかりの淋しい所でしたが、豆腐屋・肉屋・八百屋・理髪店・ラーメン屋などポツンポツンとお店も出来てきました。

また、一九七〇年から垣田とその周辺の区画整理が始まり、名鉄柏森駅の利用で江南市より地価が安いという事と、まだ自然も残り駅から歩いて十分〜十五分という便利さもあり居住者が増加していきました。

行政区としては余野区にお世話になっていましたが、サラリーマン世帯が多い現状では農業中心の余野区の慣習に馴染めず、行事参加にも不慣れでしたので一九六七年区内分離が認められました。しかし問題なのは、消防団がない、神社がない、集会所がないなど、ないないづくしの住民が乗り超えるハードルは高く、余野区との話し合いが続きました。また、余野区に属しては、直接道路の舗装、側溝の整備などの要望が、余野区長経由では、なかなか実現しませんでした。市街化区域として自分達の自治会を組織しなくてはと、一九八七年さつきヶ丘区

として承認され、初代区長さんと地元の町議会議員さんが三年間にわたりお骨折りをいただき、街路燈の設置、集会所の建設など住民の声を集約して町へ届けていただきました。その後余野区とは、余野神社の祭礼には氏子として参加し、消防団も余野区のお世話になって、人的協力が出来ない所は負担金を出しています。そして、集会所は町有地の一部の上に一九八八年建設されました。その後老朽化した集会所の建設問題が起こりましたが、二〇一一年に東日本大震災があり、二〇一四年に防災センターの機能を備えた地域のふれあい拠点として建設されました。歴史の浅い区ですが、少子高齢化が進み、御近所の絆が重要になっています。防災センターを利用したふれあい事業の重要性に気付き、手を取り合って温かい地域でありたいと思っています。

(昭和十一年生まれ)

「さつきヶ丘」という名前

どうしてさつきヶ丘ってシャレた名前になったのでしょうか。

余野区から独立し五月に報告を受けた当時の役員さんのひとこと、五月だから「さつき」でしょと、全員一致で「さつきヶ丘」になったと聞いています。

(昭和二十年生まれ)

第七節 小口（上小口・中小口・下小口）

町の北東部から西部にかけて位置する。北は扶桑町、東は河北地区、南は外坪地区・秋田地区・大屋敷地区、西は余野地区・江南市と接している。江戸時代の初め頃には、上小口・中小口・下小口の三つの区域に分かれていた。東西に県道斉藤羽黒線・県道小口岩倉線が通る。住宅地であるが、一部水田が広がる。

上小口 東部に国道四一号、区域中央を東西に県道斉藤羽黒線が走る。中央部は住宅地で、東側に水田が広がる。公共施設は、丹羽広域事務組合消防本部とわかしゃち国体記念運動公園があり、北に接する扶桑町との境界上に、県立丹羽高等学校がある。社寺は、白山社と薬師寺（曹洞宗）が所在する。

萩島は、木津用水（合瀬川）と新木津用水の間にある集落で、江戸時代から上小口の枝郷であった。社寺は、清島神社と円応寺（曹洞宗）がある。

中小口 東部に国道四一号、上小口境を南北に県道小口名古屋線が走る。西部は住宅地で、東側に水田が広がる。公共施設は、北保育園・子育て支援センター・大口中保育園（町立からのちに民営化）、大口北小学校・多世代が集う憩い広場・小口城址公園が所在する。大口北小学校は当初、五条川右岸にあったが、五条川左岸の大口北部中学校（一九八五～二〇〇七年）が大口中学校と統合したため、増改築をして二〇一〇（平成二十二）年に移設した。北小学校の跡地は、多世代が集う憩い広場となる。社寺は、小口神社・神明社・妙徳寺（臨済宗）がある。

下小口 東部に国道四一号、南北に県道小口岩倉線が走る。住宅地で、東南部に水田が広がる。公共施設は、町の中央部であることから、北児童センター・大口町役場・総合運動場といった主要な施設のほか、弥生時代から古墳時代にかけての複合遺跡である仁所野遺跡に白山ふれあいの森がある。社寺は、白山社・薬師堂（陽学院）がある。

歴史

旧石器時代の遺物として、荒井（上小口三丁目・旧小口馬喰島）出土の握斧、西山神遺跡（中小口一丁目・旧小口字西山神）出土の石器類がある。弥生時代の遺跡としては、ほ場整備の際に見つかった向江遺跡（中小口一丁目地内・旧小口字向江）の住居跡、仁所野遺跡の調査で確認した方形周溝墓群、東樋田遺跡（下小口一丁目・旧小口字東樋田）の住居跡などがある。古墳時代には、善光寺塚古墳（上小口二丁目）、小口城古墳が立地する。

承平年間（九三一～九三八年）成立の『倭名類聚抄』には、尾張国丹羽郡十二郷のひとつとして「小口郷」とあり、小口の地名が確認できる最古の史料である。また、九二七年成立の『延喜式』神名帳の小口神社と『尾張国内神名帳』の小口天神は同一であり、九〇〇年代には小口神社（小口天神）を中心に集落が形成されていたことがわかる。

一四〇〇年代には、尾張国守護代であった織田敏広の弟、織田遠江守広近が一四五九（長祿三）年に小口城を築城し、その後犬山に木之下城も築城して美濃からの侵攻に備えた。小口城と木之下城を往来する「織田街道」という道が存在したと伝承に残っている。広近は余野地区の徳林寺を再興

し、出家後には小口城の北西に隠居所を建てた。この隠居所が、のちの妙徳寺といわれている。

江戸時代の『覚書』には、「枝郷 上小口 中小口 下小口 萩島」、戸数二〇二軒・人口一〇五〇人とある。一六〇〇年代に、すでに小口の中で上小口・中小口・下小口と萩島といった集落区分があったことがわかる。『徇行記』には戸数四一七軒・人口一九四一人とある。また、小口村は尾張藩領小牧代官所支配下ではあるが、新田を除き尾張藩付家老で尾張藩領美濃今尾藩主である竹腰山城守の給地であった。小口村は、上小口・中小口・下小口の三村に分かれ、支邑として萩島・北外坪・竹田・下島・野田野・稲口・寺田の七つに分かれ、萩島は上小口に「属す」と明確に書かれているが、北外坪・稲口・寺田は下小口の東南、竹田・下島・野田野は下小口の西と位置関係のみが書かれている。また、竹田・下島・野田野は、砂地で茶畑が多く、その東側は黒土で土性がよいとある。

入鹿清右衛門新田は、『覚書』によると、戸数七軒・人口三〇人とある。『徇行記』には戸数一六軒・人口四四人で、場所は木津用水と新木津用水の間で萩島集落の南に位置する。一八七八（明治十一）年に小口村へ編入された。一八

八九年、余野村と合併し小口村大字小口と大字余野の二つの大字で編成されるが、一八九五年に余野が柏森村に編入され大字は小口のみとなる。一九〇六年に大口村の大字となり、以後、名称地番変更が施行されるまで大口村・大口町の大字名のひとつであった。

区長制度下では、小口区長は上小口・中小口・下小口の輪番で選出されていたと考えられ、一九四五（昭和二十）年以降は、三地区それぞれが区長を選出するようになった。

地区内集落

上小口区 ほかの区とは異なり、集落が比較的固まっていることから、木津用水で南北につながる枝郷の萩島を除けば区内での地区分けはなく、区長の選出方法も世代順に選出している（4-1-16）。副区長は、次年度の区長内定者が務める。この他、評議員一九人で構成されている。萩島は総代などが上小口区会に出席し、単独でできる行事を除いて行動を共にすることが多い。

工場誘致により、民成紡績株式会社の敷地内に寮ができ、地区内にも社宅ができたため、一九五七年に人口割合が前年の九・四％から一六・四％にまで上昇し、一九六〇年に

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1932	620	8.5	112	8.4
1953	763	8.8	—	—
1963	1,834	16.3	—	—
1973	2,067	13.2	1,054	20.1
1983	1,722	10.2	596	12.4
1993	1,572	8.5	512	9.3
2003	1,789	8.5	626	9
2013	1,577	6.9	610	7.3
2022	2,181	9	823	8.4

4-1-17 上小口の人口・世帯の推移
(1932年は『大口村誌』、1953年以降は町の統計データによる)
※表中「-」は記載なし。



4-1-16 上小口地区内集落図

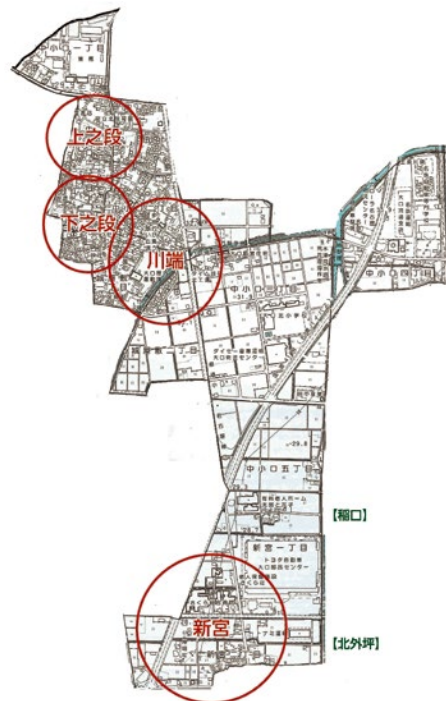
は一八・三%まで上昇した。それ以降、紡績業の衰退もあり人口は徐々に減少した。しかし、二〇一〇年代後半には工場・社宅跡地の分譲化が進み、人口・世帯数とも一気に上昇した（4-1-17）。

中小口区 地区内は川端・上之段・下之段・新宮に分かれ、区長を選出している（4-1-18）。副区長は、次年度の区長内定者が務める。区会議員は、川端から南部・中部・北部の代表三人、上之段から東部・西部の代表二人、下之段から東部・中部一・中部二・西部・北部の代表五人、新宮総代一人の合計十一人で構成される。

人口は増加傾向にあるが、特筆すべき理由として一九七〇年に一部市街化区域になったことや町営住宅の建設により、人口・世帯数とも大きく増加したことが挙げられる（4-1-19）。

	人口 (人)	人口割合 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1932	772	10.5	140	10.6
1953	923	10.6	—	—
1963	968	8.6	—	—
1973	1,462	9.3	426	8.1
1983	1,626	9.6	432	9
1993	1,795	9.7	508	9.2
2003	2,054	9.7	654	9.4
2013	2,201	9.6	774	9.3
2022	2,398	9.9	949	9.6

4-1-19 中小口の人口・世帯の推移
(1932年は『大口村誌』、1953年以降は町の統計データによる)
※表中「—」は記載なし。

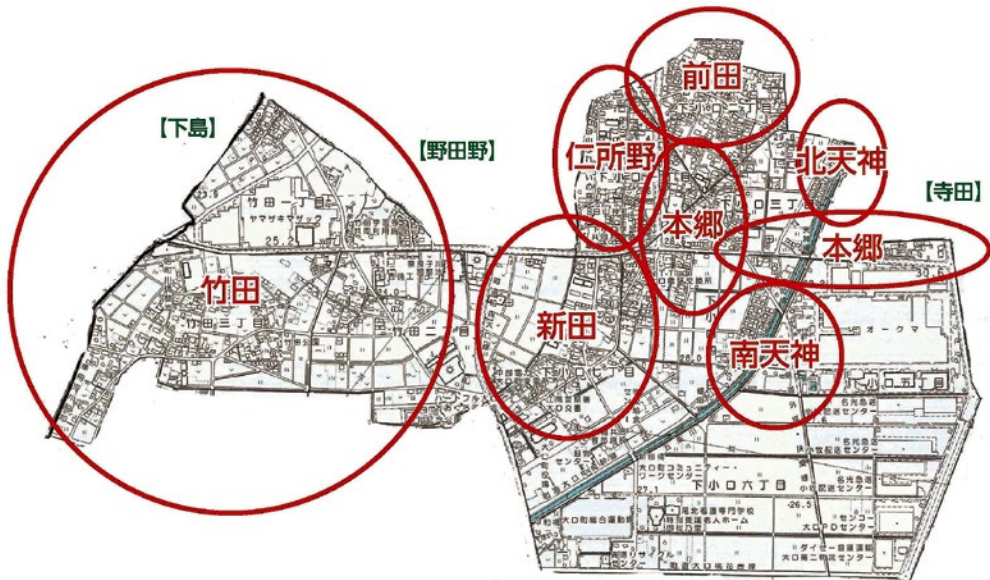


4-1-18 中小口地区内集落図

	人口 (人)	人口割 (%)	世帯数 (戸)	世帯割合 (%)
1932	1,078	14.7	197	14.9
1953	1,201	13.8	—	—
1963	1,268	11.3	—	—
1973	2,116	13.5	632	12
1983	2,763	16.3	889	18.5
1993	3,001	16.2	932	17
2003	3,501	16.6	1,291	18.5
2013	3,894	17.1	1,573	18.8
2022	4,059	16.8	1,797	18.3

4-1-20 下小口の人口・世帯の推移
(1932年は「大口村誌」、1953年以降は町の統計データによる)
※表中「—」は記載なし。

下小口区 地区内は竹田組・新田組・天神組・前田組・仁所野組・本郷組の六地区に分かれ、区長を選出している(4-1-21)。副区長は、次年度の区長内定者が務める。区議員は一九人で構成される。竹田組は、竹田集落と下島集落からなり、竹田組の代表のみ「総代」と呼ぶ。人口は増加傾向にあるが、一九六〇年代から一九八〇年代にかけて特に増加した要因として、企業の寮が整備されたことが挙げられる(4-1-20)。



4-1-21 下小口地区内集落図

